

# 総合型選抜 二〇二三年度過去問題

## 日本語日本文学科 日本語日本文学コース

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

禅智内供の鼻（ぜんないぐ）といえば、<sup>\*1</sup>池（いけ）の尾（お）で知らない者はない。長さは五、六寸あって、上唇の上から頤（あご）の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。いわば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、<sup>\*2</sup>沙弥（しやみ）の昔から内道場（ないどうじょうぐ）供奉（ぶ）の職に陞（のぼ）った今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論（もちろん）表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰（かつごう）すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思ったからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしているという事を、人に知られるのが嫌（いや）だったからである。内供は日常の談話の中に、鼻という語が出て来るのを何よりも惧（おそ）れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。――一つは实际的に、鼻の長いのが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が<sup>\*3</sup>鈍（かたまり）の中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳（ぜん）の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてもらいう事にした。しかしこうして飯を食うという事は、持上げている弟子にとっても、持上げられている内供にとっても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした<sup>\*4</sup>中童子（ちゅうどうじ）が、嚏（くしゃみ）をした拍子に手がふるえて、鼻を粥（かゆ）の中へ落した話は、当時京都まで喧伝（けんでん）された。――けれどもこれは内供にとって、決して鼻を苦に病んだ重（おも）な理由ではない。内供は実にこの鼻によって傷（きず）けられる自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こういう鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合（しあわ）せだといった。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思っただからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのでだろうと批評する者さえあった。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩（わづらわ）される事が少くなつたとは思っていない。内供の自尊心は、妻帯というような結果的な事実にも、この自尊心の毀損（きそん）を恢復（かいふく）しようと試みた。

第一に内供の考えたのは、この長い鼻を実際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向つて、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝（こ）らして見た。どうかすると、顔の位置を換（か）えるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖（ほおづえ）をついたり頤（あご）の先へ指をあてがったりして、根気よく鏡を覗（のぞ）いて見る事もあった。しかし自分でも満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえって長く見えるような気さえた。内供は、こういう時には、鏡を筥（はこ）へしまいながら、今更のようにため息をついて、不承不承にまた元の経机（きょうぐい）へ観音経をよみに帰るのである。

それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、<sup>\*5</sup>僧供（そうぐ）講説（こうせつ）などのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙（すき）なく建て続いて、湯屋（ゆや）では寺の僧が日ごとに湯を沸かしている。従つてここへ出入する僧俗の類も甚（はなはだ）多い。内供はこういう人々の顔を根気よく

物色ぶつしやくした。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。だから内供の眼には、紺の水干すいかんも白の帷子かたびらもはいらぬ。まして柑子色かうじいろの帽子や、\*6椎鈍しうにびの法衣ころもなぞは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。――しかし鍵鼻かぎばなはあつても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重たびかさなるに従つて、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下っている鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顔を赤めたのは、全くこの不快に動かされての所為しよゐである。

最後に、内供は、\*7内典ないてん外典げてんの中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようと思つた事がある。けれども、\*8目連もくれんや、舍利弗しやりほつの鼻が長かつたとは、どの経文にも書いてない。勿論\*9竜樹りゆうじゆや\*10馬鳴めみようも、人並の鼻を備えた菩薩である。内供は、震旦しんたんの話のついでに蜀漢しよくかんの\*11劉玄德りうぐわんとくの耳が長かつたという事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どの位自分は心細くなるだろうと思つた。

内供がこういう消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここにいうまでもない。内供はこの方面でも殆ほとん出来るだけの事をした。烏瓜からうりを煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿ちようを鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五、六寸の長さをぶらりと唇の上にぶら下げているではないか。

ところがある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上つた弟子の僧が、知己しるべの医者から長い鼻を短くする法を教わつていた。その医者というのは、もと震旦から渡つて来た男で、当時は長樂寺ちやうらくじの供僧になつていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは気にかけないという風ふうをして、わざとその法もすぐにやつて見ようとはいわずにいた。そうして一方では、気軽な口調で、食事の度たびごとに、弟子の人数をかけるのが、心苦しいというような事をいった。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏せて、この法を試みさせるのを待つていたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからないはずはない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそういう策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのである。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聴従ちやうじゆうする事になつた。

その法というのは、ただ、湯で鼻を茹ゆでて、その鼻を人に踏ませるといふ、極めて簡単なものであつた。

湯は寺の湯屋ゆやで、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れないような熱い湯を、すぐに提\*12に入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷やけどする惧おそれがある。そこで\*13折敷おしきへ穴をあけて、それを提の蓋ふたにして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧がいった。

――もう茹うつた時分うだでござらう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤のみの食つたようにむず痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立っている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になって、鼻を床板の上へのぼしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時々気の毒そうな顔をして、内供の禿げ頭を

見下しながら、こんな事をいった。

——痛うはござらぬかな。医師は責めて踏めと申したで。じゃが、痛うはござらぬかな。

内供は首を振って、痛くないという意味を示そうとした。ところが鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、上眼を使って、弟子の僧の足にあかざれ輝のきれいているのを眺めながら、腹を立てたような声で、

——痛うはないて。

と答えた。実際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりもかえって気もちのいい位だったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒あわつぶのようなものが、鼻へ出来はじめた。いわば毛をむしった小鳥をそっくり丸炙まるやきにしたような形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこういった。

——これを鑷子けぬきでぬけと申す事でござった。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙って弟子の僧のするなりに任せておいた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳わけではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子で脂あぶらをとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の茎のような形をして、四分ばかりの長さにくれるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような顔をして、

——もう一度、これを茹でればようござる。

といった。

内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧のいうなりになっていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、何時いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻かぎばなと大した変りはない。内供はその短くなった鼻を撫なでながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極きまりが悪わるるそうにおずおず覗いて見た。

鼻は——あの顎あごの下まで下っていた鼻は、殆ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅わずかに上唇の上で意気地いくじなく残喘ざんぜんを保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕あとであろう。こ  
うなれば、もう誰も晒わらうものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内  
供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはいないかという不安があった。そこで内供は誦ず経する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そつと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まっているだけで、格別それより下へぶら下つて来る気色けしきもない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供は先、第一に、自分の鼻を撫なでて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書写の功を積んだ時のような、のびのびした気分になった。

ところが二、三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑おかしそうな顔をして、話も碌々ろくろくせず、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そのみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子ちゅうどうじなどは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふつと吹き出してしまった。用をいいつかった下法師しもほうしたちが、

面と向っている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

内供は始、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。――勿論、中童子や下法師が晒う原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ晒うにしても、鼻の長かった昔とは、晒うのにどこことなく容子がちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えるといえ、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

――前にはあのようにつけつけとは晒わなんだて。

内供は、誦しかけた経文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々こう呟く事があつた。愛すべき内供は、そういう時になると、必ぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かった四、五日前の事を憶い出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまうのである。――内供には、遺憾ながらこの間に答を与える明が欠けていた。

――人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張していえば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいような気にさえる。そうして何時の間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。――内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。

そこで内供は日ごとに機嫌が悪くなった。二言目には、誰でも意地悪く叱りつける。しまいには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさえ、「内供は<sup>\*14</sup>法慳貪の罪を受けられるぞ」と陰口をきくほどになった。殊に内供を忿らせたのは、例の悪戯な中童子である。ある日、けたたましく犬の吠える声がするので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまわして、毛の長い、痩せた尨犬を逐いまわしている。それもただ、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囁しながら、逐いまわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひったくって、したたかその顔を打った。木の片は以前の鼻持上げの木だったのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなったのが、かえって恨めしくなった。

するとある夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさいほど枕に通って来た。その上、寒さもめつきり加わったので、老年の内供は寝つこうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふと鼻が何時になく、むず痒いのに気がついた。手をあてて見ると少し水気が来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。

――無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花を供えるような恭しい手つきで、鼻を抑えながら、こう呟いた。

翌朝、内供何時ものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や橡が一晚の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたように明い。塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光っている。禅智内供は、蓐を上げた縁に立って、深く息をすいこんだ。

殆、忘れようとしていたある感覚が、再内供に帰って来たのはこの時である。

内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から顎

の下まで、五、六寸あまりもぶら下っている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通り長くなったのを知った。そうしてそれと同時に、鼻が短くなった時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じた。

——こうなれば、もう誰も晒わらうものはないにちがいない。

内供は心の中でこう自分に囁ささやいた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら。

(出典 芥川龍之介「鼻」)

- \*1 池の尾 現在の宇治市池尾。
- \*2 沙弥 少年僧。
- \*3 鉢 金属製の椀。
- \*4 中童子 寺で使う十二、三歳の少年。
- \*5 僧供講説 「僧供」は僧に対する供物、「講説」は経典などについて講義すること。
- \*6 椎鈍の 墨色の
- \*7 内典外典 「内典」は仏教の典籍、「外典」は仏教の経典以外の書籍。
- \*8 目連や舍利弗 ともに釈迦の十大弟子の一。
- \*9 竜樹 古代インドの僧。
- \*10 馬鳴 古代インドの仏教詩人。
- \*11 劉玄徳 呉・魏と天下を三分して争った三国の蜀漢の初代皇帝。
- \*12 提 柄がなく弦のある、酒を注ぐ器。
- \*13 折敷 四方に折りまわした縁をつけた、薄い板の盆。
- \*14 法慳貪の罪 仏法では十戒の一つである慳貪(自分の物を惜しみ他の物をむさぼること)の罪を犯すと餓鬼道に堕ちるとされた。

問一 禅智内供にとって、鼻はどのようなものか。読み取れることを二〇〇字以内で述べなさい(字数には句読点を含む)。

問二 傍線について、内供が「満足そうに眼をしばたいた」のはどのような気持ちか、二〇〇字以内で自分の意見を自由に述べなさい(字数には句読点を含む)。

問三 この作品を通じて作者は何を表現しようとしたと思うか。四〇〇字以内で自分の意見を自由に述べなさい(字数には句読点を含む)。